

# 「ね、そう思わない？」

川北 英(公益財団法人 ギャラリーエークウッド館長)

2014年6月、青森の夏はまだ始まっていないかのようにひんやりとした空気が流れていた。青森国際芸術センターは「あの時」から時間が止まったように、静寂の中にあった。弱々しい虫の声、キツという鳥の鳴き声のほかには自分の足音しかしない。安藤忠雄氏の設計による空間に入ると、ずっと以前からそこにあるかのように《相對温室》があった。ポタッ！ポタッ！コンクリート打放しの空間に不似合いなほどに自然な水の滴り落ちる音。石の周りには苔やシダが生えている。思わずシャッターを切る。カシャッというシャッター音が一瞬響き、またもとの静寂に帰る。そう、確かに時間は止まっていない。水は流れ、植物は成長し、ひょっとすると水の中の幼虫たちが成虫になるかもしれない。國府理はこの作品を通じて、何を語ろうとしていたんだろう。何度も何度も自分に問いながら作品を見た。

《相對温室》？なんだこのタイトルは？

“絶対”に対する“相對”、“外部”に対する“内部”、見方によって変わる価値観や意味を彼はこの作品を通じて語りかけてきたのではないか。そのことが、先日豊永政史氏と話していて理解できた。今までに彼の作品はいくつも見て来た。例外なく彼の作品は視覚的に面白ろく、美しい。しかしその表面的な表現の裏に、現代文明の歩もうとしている方向性に対する警笛が潜ませてあることを僕は深く理解していなかった。でもその表現の仕方は、独断的で一方的なコンセプチュアルなものではなく、「ね、そう思わない？」という口語調の表現である。彼の作品を前にして僕は頷くしかない。もう一度、初めから彼の作品を前に彼との会話をしてみようと思う。